
中国における文明の重荷

——民主化への影響——

鄭永年

〈シンガポール国立大学〉

文明とデモクラシー

中国研究に従事する多くの学者は、次のような簡単な問いを提起することができるだろう。「中国は世界の民主クラブに加入することができるのだろうか？」中国が民主政治を発展させることができるか否かは、内部への影響だけでなく、外部への巨大この上ない影響をも孕んでおり、アジアおよび全世界に影響を与えずにはいられない問題である。ここ数十年の間に、ますます多くの国家と地域——特にアジア——が民主化への転換を果たしているが、ただ中国のみがその例外となっている。中国はフクヤマのいう「歴史の終焉」から逃避し、ハンティントンのいう「第三の波」からも逃避しているのである。

中国のデモクラシーに関する議論の中では、中国文明と現代デモクラシーの共存可能性が一貫して主要なテーマであった。西方のデモクラシーの源流が古代ギリシアにおける民主政治の実践と理念に遡れるように、中国の非民主性もまた中国悠久の文明伝統と関係があるのではないか。中国のデモクラシー追求者たちはこの面ですでに多くの経験を重ねてきた。彼らは現存する非民主的政権に挑戦するだけの力がないときには、いつもその攻撃の矛先を中国の文明に向けてきた。1920年代の“五四運動”はその例であり、1980年代の“黄河文明”と“海洋文明”の論争もまたその例である。この種の論争は90年代以降も止むことなく繰り返されてきた。90年代初め、ハンティントンの「文明の衝突」を発表すると、すぐさま中国の研究者たちの関心を引き起こした。ハンティントンは、日本と韓国が民主化を果たしたのは両国が中国とは異なる文明であるからであると論じた。しかし日本と韓国は、一貫して中国文明の影響を深く受け、儒教的伝統の一部分であると見なされてきた。この両国が民主クラブに加入したのに、なぜ中国は依然としてその外に置かれているのであろうか。

中国の研究者と政治家の多くは中国文明に対して自信を持っている。アジアの“四小龍”の急速な経済発展と儒教文明とのあいだに関係を見出した人びとは、とりわけ自信を持っている。彼らは儒教復興の時代が到来することを信じている。保守的な中国の政治家たちもその実現を楽観視し、これを称揚している。改革開放以来、伝統的マルクス主義と毛沢東思想を核心とするイデオロギーが凋落したことで、儒教はその空白を埋める役割を担ったのである。儒教の伝統に現代デモクラシーの要素を捜しあてて、儒教デモクラシーの概

念を創出する者さえ出現した。これらは幼稚な試みには違いないが、疑いなく多くの人びとが今もこのような努力を続けているのである。しかし中国の自由派知識分子はこれには同意しない。彼らは中国の文明がしだいに中国の民主クラブ入りの阻害要素となっていると感じているのである。このことは、中国社会科学院前副院長の李慎之の態度に良く表れている。李慎之は一貫して現代自由派の代表として見なされてきたが、彼はシンガポールのリー・クアンユーが1997年のアジア金融危機の後に儒教伝統を批判し始めたことを大いに歓迎した。それ以前、リー・クアンユーは一貫して儒教精神の推奨に力を入れたので、李慎之はリーのこの転身が人びとの儒教に対する認識をよりはっきりさせるのに役立つと信じたのである。

中国における文明の重荷はどこにあるか

研究者たちが飽きることなく科学的な指標、例えば一人当たり平均 GDP、中産階級の規模、教育水準などを用いてデモクラシーを解釈している時、彼らは文明が政治に利用され、民主化の重荷となることを忘れている。中国における文明の重荷はどこにあるのか。我々は日本文明、韓国文明と中国文明を比較してみることができる。するとさまざまな意見の相違にもかかわらず、次のような共通認識が研究者の間に存在していることがわかる。すなわち中国、日本、韓国はいずれも儒教文明圏に属しているという認識である。近代になって、中国で儒教文明が各種の外来イデオロギーの攻撃を受けていた頃、日本、韓国を含むアジアのその他の国家では、儒教文明は厚い保護を獲得していた。今日に至って、儒教伝統の多くは中国では既に消滅したか、あるいは消滅のずっと後になって拾い上げられているといった状態であるのに対し、日本、韓国などの国においてはそれらは相当にしっかりと保存されてきている。なぜ儒教はこれらの国家では民主化の阻害要素とならず、中国では阻害要素となったのであろうか。

日本、韓国の民主化と中国の非民主化を解く鍵は、ハンティントンの説くようにこれらの国家が異なる文明を発展させたことにあるのではなく、これらの国家が儒教文明圏の異なる位置に存在するという点にある。簡単に言えば、中国は儒教文明圏の中心に位置し、他のアジア国家は周縁地帯に位置しているのである。一つの比喻を用いて説明すれば、中国文明は一つの球状の有機体のようなものであり、他のアジア国家の文明は幾層にも重なったパイ生地のような複合体である。一つの自給自足的な有機体として、中国文明はそれ自体独特な発展の方向性を形成していた。また一つの内陸（land-locked）文明として、中国は外部世界の変化に対して十分に敏感とはなり得ず、それに対する反応は非常に緩慢であった。外部世界は中国文明に対し影響を及ぼすことはできたが、中国文明の発展方向を変えることは非常に困難であった。生存のため、中国文明は社会・経済の環境変化に対して何らかの反応を示さねばならなかったが、自己の本質を保護するため、その反応は緩慢なものでなければならなかった。これが近代以降の人びとが言う「中学をもって体となし、西学をもって用となす」〔中体西用〕の本質である。つまり中国文明は外来の影響を

常に拒絶できるとは限らないが、そのような影響を受け入れる場合には、それを内在化させることによって文明の根本の変化を招くことがないようにしなければならなかったのである。

一方、儒教文化圏のその他の国家はこれとは異なっていた。新しい文明は非常に容易に旧来の文明の上に加えられたのである。これらの国家では、儒教は元来輸入されたものであり、当時の中国からの挑戦に対処するために用いられたのであった。また、これらの国家の多くは海洋国家であり、いずれも外部の変化に対し十分な敏感な感覚を保持していなければならなかった。さもなければ彼らの生存自体が挑戦にさらされることになったからである。新たな文明が旧来の文明の上に加えられる時、新・旧両文明に衝突が生じるとは限らない。日本、韓国そして後の台湾では、いずれも一種の「中体西用」現象が見られたとすることができ、中国とは明らかなコントラストを生み出したのである。

デモクラシーの挑戦に直面した時、日本と韓国はデモクラシーを彼らの政体の主体として受け容れた。デモクラシーの実践は、日本と韓国においては現存の文明にとって有害なものと思なされることはなく、かえってデモクラシーを新たな文明の層として受け容れたのである。このことはもちろん、新たな文明を受け容れるのに如何なる政治上の阻害要素も存在しなかったということの意味しない。彼らは中国から輸入された文明を保護するために、別の新たな文明を拒絶したりはしない、ということなのである。彼らは新たな文明を旧来の文明の上に重ね置いた後、デモクラシーを政治活動を行う上での主たる枠組みとした。しかし、旧来の政治実践は消失することなく、デモクラシーという大きな枠組みの下に隠れて隠然として存在しつづけているのである。人々は今日の日本、韓国、台湾の民主政治の表象の背後に旧来の政治形式を見て取ることができる。

しかし中国の状況はこれとは大きく異なっていた。旧文明による新文明への抵抗を除いても、政治上の阻害要素はさらに強大であった。西方の文明はまず中国本土の文明に対する一種の脅威と思なされた。当然のことながら本土の文明は外来文明に自己が影響され、またそれが自身に浸透してくることを望まなかった。その圧力が極めて大きい場合には、中国の本土文明は外来文明に対して調整を行い、時には外来文明のいくつかの要素を受け容れたが、このような調整と受容は外部からの押し付けによるものであってはならなかった。

ただ強調しなければならないのは、中国の本土文明は民主政治の中国への拡大を阻止したことはなく、デモクラシーの拡大を真に阻害したのは政治的要素であったということである。文明もまた一種の政治領域であり、いったん政治と関われば、中国文明も自己の使命を持つものと思なされた。挑戦に直面するたびに、各種の政治勢力は自らが中国文明の擁護者であると宣言してきた。明らかに、文明擁護の名義を用いて自己の政治的利益を追求し保護することは、非常に便利で有用かつ効果的な政治手段であり、政治権力の重要なリソースともなる。ここにおいて文明の阻害要素と政治の阻害要素が結合し、また保守主義と民族主義が結合するのである。そのために中国の西方文明に対する抵抗は、儒教文化

圏全体の中でも最も強力なものになるのである。

文明と政治

文明は一種の政治的な力として中国近代史を貫いている。政治力が制度の刷新を行うことによって現代の挑戦に対処することができない場合に、彼らは文明に眼を向けて、過去の事物によって現実の問題を解決しようと望むようになり、また過去の事物によって現在を正当化しようと望むようになるのである。

西洋文明が中国文明に挑戦した時、中国のエリート集団は全面的に西洋文明を拒絶したわけではなかった。19世紀末、彼らは中国の近代化建設を進め始めた。当時彼らは、近代化建設は軍事建設を優先しなければならないと認識するようになったが、これは彼らの自発的な選択ではなく時勢に迫られてのものであった。当時の西洋国家は帝国主義を奉じており、軍事力を持たない国家はその後塵を拝するしかなかった。しかし日清戦争の敗北は、軍事の近代化だけでは不十分であることを証明したのであった。政治改革がより重要なものと考えられ始め、さまざまな改革が試みられた。それらが失敗すると、革命が起こった。この過程は複雑なものであるが、総体的に言えば、この過程こそ中国のエリートが西洋を学んだ過程であった。孫中山〔孫文〕が建国した中華民国および彼の提唱した「三民主義」は共に、西洋の民主政治の原則を基礎としたものであった。孫中山は民主主義原則を運用することが不可能であると悟ってから、ようやく眼を当時のロシアへと向け始めた。蒋介石による北伐の後、中国に初めて近代国家の枠組みが出現した。疑いもなくこの国家はマルクス・レーニン主義の国家原則に基づいて建設されたものであった。

しかし、この近代国家の枠組みの基礎は決して堅固なものではなかった。蒋介石はすぐに中国文明の中に政治リソースを捜し求め、いわゆる“新生活運動”が展開されたのである。この運動は主に次の三つの目標をもっていた。①土着の儒教イデオロギーを用いて当時の共産党の共産主義イデオロギーに取って代わる。②各地の政治勢力の中央政府に対する忠誠と服従、国民党内各派の蒋介石本人に対する忠誠と服従を養成する。③儒家の学説を用いて当時勃興しつつあったさまざまな社会勢力を統合する。蒋介石がこのような運動を発動したのは、もちろん蔣本人が儒教を信奉していたためでもあるが、儒教がここにおいては政治に奉仕するものとして用いられたということがわかるであろう。

共産党政権が国民党政権に取って代わった後の儒教の運命についてはよく知られている通りである。毛沢東の儒教に対する厳しい対応は、数十世紀も前の秦の始皇帝に勝るとも劣らなかった。しかしそれにもかかわらず、毛沢東も最終的にはやはり彼の統治を補助してもらうため、ひそかに儒教に助けを求めなければならなかった。これがいわゆる“雷鋒に学べ”運動の根源であった。毛沢東の1949年以降の専制的な政策決定は、最終的には中国の経済危機（“大飢饉”）を招き、党内には集団的政策決定と民主を求める声が出現し始め、毛沢東個人の権威は相当に動揺を見せたのである。明らかなのは、毛沢東が雷鋒を気に入ったのは、雷鋒が毛沢東本人および彼の党にたいし無私にして無限の忠誠をもって

たからであるということだ。この種の精神は伝統的儒教精神であり、“雷鋒に学べ”運動は形を変えた儒教復興運動であったとすることができるであろう。当然、“雷鋒に学べ”運動もまた毛沢東本人と共産党の小伝統、つまりは“階級闘争”に組み込まれたのであった。

改革開放運動は、中国経済を資本主義化へと向かわせたが、文明を政治に奉仕させる伝統が終わることはなかった。人びとは最初、資本主義式の経済は中国政治を民主化へと向かわせるであろうと予想していた。しかし現実には中国の政治エリートは、民主政治を現代政治活動の基礎として受け容れる気はなかった。逆に彼らは伝統へと回帰していったのである。90年代末以来の“徳治”運動は、さしずめ現代における“新生活運動”あるいは“雷鋒に学べ”運動であろう。なぜ“徳治”を提唱する必要があったのであろうか。鄧小平が改革開放政策を実行して以来、共産党は民主化の必要性を否認したことはない。党内の民主化、社会の民主化、さらには立憲政治の民主化さえも容認していたのである。しかし、権力者にはこれまで民主改革を本気で実行する気はなかった。だが、腐敗の抑止、法治の建設、政府の正統性、執政党のモデルチェンジなど多くの問題は、民主化がなされなければ非常に解決が困難である。そこで現れたのが“徳治”への回帰であったのである。儒教的伝統における“徳治”の重要性を否定する者はいないであろうが、現代という背景下に“徳治”を提唱することは、明らかに執政党に対する忠誠、党の最高指導者層に対する忠誠を強調するためのものであるといえる。

文明が政治となるとき

ひとつの非常に成熟した価値体系として、儒教は必ずしも特定の政権に従属しなければならないというわけではない。中国本土では儒教はこれまで、数千年におよぶ封建諸王朝、国民党政権、および共産党政権といった異なる政権下で存在し続けてきた。海外においては、儒教は民主体制のもとで確固たる生存の場を獲得してきた。いかに外界の変化に対する反応が緩慢であろうとも、中国文明は反応を起こす能力をもっているのである。過去数千年のあいだに、中国文明にはすでに巨大な変化が起こっている。儒教に現代デモクラシーの要素を捜し求めることは一種の徒勞であろうが、中国文明と現代デモクラシーが相容れないものであることを証明する如何なる理由もまた存在しないのである。

真に重要なのは文明の政治である。文明が一種の政治リソースとなる時、デモクラシーが中国文明の中に浸透することは非常に困難となる。近代以来、中国の政治エリートは新しい国家を建設する過程で非常に重要な役割を演じてきた。彼らは西洋について学ぶ一方で、一貫して、便利に利用できる伝統を用いて彼らの統治を打ち固めようとしてきた。彼らがこのような行動を見せたのは彼ら自身の利益のためでもあり、彼らが文明の制約に直面していたからでもあったのである。仮に彼らが豊富な文明ソースを利用しようとしなければ、彼らの“敵”が文明リソースを利用して彼らに抗したであろう。

この意味において、中国は一つの文明国家 (civilizational state) である。今日、文明は依然として中国政治において重要な役割を演じており、今日の中国における民族主義は依然

として伝統の復興を目標としている。また指導者層は依然として過去に政治問題の解決方法を見出そうとしている。人びとがなお過去に目を向け、未来を見つめないとすれば、文明は引き続き民主政治の阻害要素となるであろう。もちろん文明はスケープゴートに過ぎないのである。

(原文は中国語。邦訳 磯部美里)